



第 172 号

二〇二四年三月二日発行
発行者 奈良県立
橿原考古学研究所
奈良県橿原市畝傍町一番地
編集者 北井利幸

可搬型蛍光X線分析装置を用いた

ガラス玉の分析

小倉頌子・奥山誠義

一. はじめに

蛍光X線分析法は、対象物質にX線を照射することで得られる特性X線(蛍光X線)のエネルギーおよび強度から、物質を構成する元素を特定する分析手法である。物質を構成する最小単位は原子であるが、元素は原子の種類を指す。X線照射によって励起した原子は、安定化するためエネルギーを放出するが、元のエネルギーとの単位差が特性X線にあたる。元素は種類ごとに固有のエネルギーを持つため、特性X線エネルギーも各元素によって異なる。したがって、特性X線を測定することにより、対象物質を構成する元素の種類と含有量を求めることができる。分析装置の種類によっては非破

壊での材質調査が可能であるため、本手法は今日では文化財の分野でも広く利用されている。

橿原考古学研究所では、可搬型の蛍光X線分析装置を導入した¹⁾。そこで、本装置の本格的な運用に向けて、試験的にガラス試料の分析をおこなった。本稿はその第一報として、分析結果と今後の課題について報告する。

二. 日本国内におけるガラスの導入

ガラスの歴史は古く、その起源は紀元前三〇〇〇年頃の西アジアやエジプトであるとされ、その後、地中海周辺諸国をはじめアジア各地に製品および製法が伝わったと言われている²⁾。

日本国内における本格的なガラス

次 目

可搬型蛍光X線分析装置を用いたガラス玉の分析
小倉頌子・奥山誠義
中国陕西省・甘肃省視察調査記
中村健太郎
漢城百濟博物館との包括連携協定締結
小栗明彦
陕西省考古研究院、西北大学文化遺產學院との友好共同交流協定締結
5 4
令和五年度イタリヤ研修記
宇野隆志・北井利幸
研究集会・いのししの会、アトリウム展、計報、附属博物館展示案内
北井利幸
6 5
編集者 8

生産の開始時期は七世紀後半であるが、紀元前三世紀頃にはガラス製品が国外の諸地域から伝わったとされる。ガラスの成分組成は生産された地域や時期によって異なるとされ、ガラスの起源を探る上で重要な要素となる。塚塚隆保氏らの研究により、日本各地で出土したガラス製品は複数の地域からもたらされたものであることが明らかとなっている³⁾。

三. 装置および分析方法

使用した装置は、アワーズテック株式会社製の可搬型蛍光X線分析装置OURSTEX 100FAである。文化財の科学調査では、対象となる文化財の非破壊・非接触が原則である。人為的な破壊がなくても、移動に伴う衝撃や環境の変化もまた文化財にとっては負荷となる。そのため、調査による移動は極力避けることが望ましい。本装置は分解して持ち運べるため、長距離移動が困難あるいは所蔵機関からの持ち出しが不可能な文化

財であっても、移動することなく調査できるといふ利点がある。また、本装置は、ナトリウム(Na)やマグネシウム(Mg)といった原子番号の小さい軽元素の分析感度が良いという特徴があり、ガラスなどの軽元素を主成分とする物質の成分分析に適している。

分析時の測定条件は表1の通りであり、X線の照射方法などを変えて一測定あたり三通りの分析をおこなっ

表1 測定条件

管球	Pd	
	ダイレクト	モノクロ
分光モード	ダイレクト	ダイレクト
管電圧	15keV	40keV
管電流	0.5mA	
照射径	3mm	
測定時間	100sec	
測定雰囲気	真空	

た。分光モードは、X線管から照射される一次X線を試料に直接照射するダイレクトモードと、一次X線を分光結晶により単色化して試料に照射するモノクロモードがある。後者は中々重元素の測定に用いられる分光モードである。

四. 分析試料

分析の対象とした試料は、釜窪大谷東原古墳より出土したガラス小玉一〇点である。ガラス小玉は墳頂部の西主体部の木棺内から、水晶製の切子玉や管玉などともに二〇点出土した。大半は径三・二〇～五・一五mm、厚さ一・八〇～二・六〇mmである。径七mm前後、厚さ五mm以上と大きなものもある。今回は試験的に一〇点(写真1、報告書図二二～二九)の分析をおこなった。色は濃青色三点(No.19～21)、青緑色系七点(No.22～28)であり、青緑色系は個々の色調に微妙な違いがある。表面分析となるため、試料表面に付着物等がなく、可能な限り平坦な部分を分析面とした。

五. 分析結果と考察

No.19(濃青色)およびNo.28(青緑色系)の蛍光X線スペクトルを例と

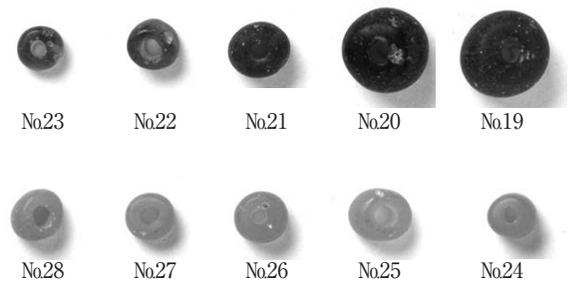
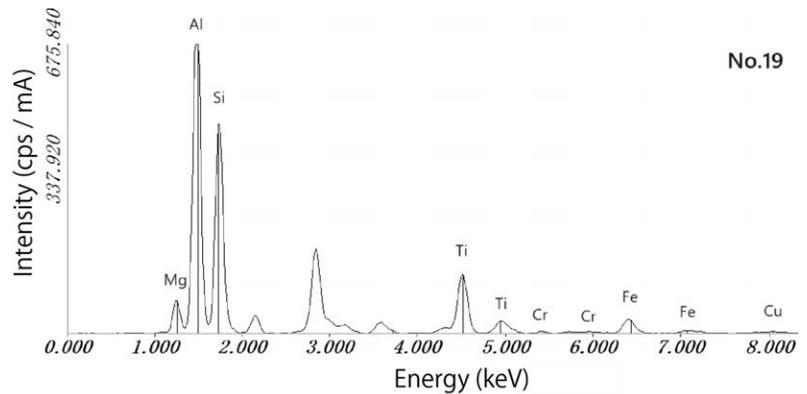
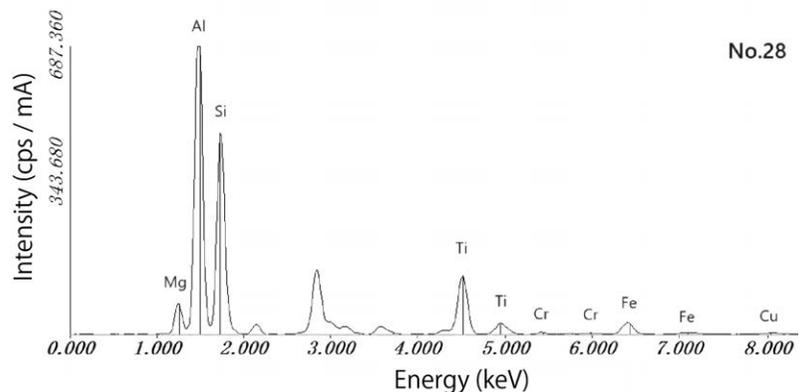


写真1 分析対象試料

して掲載した(図1～3)。縦軸は蛍光X線の検出量($\text{cps}/\text{m}^2/\text{sr}$)、横軸は同エネルギー値(keV)を表す。いずれの試料でも、マグネシウム(Mg)、アルミニウム(Al)、ケイ素(Si)、チタン(Ti)、鉄(Fe)、銅(Cu)、鉛(Pb)、クロム(Cr)のピークを検出できた。なお、パラジウム(Pd)のピークが明瞭に確認できるが、管球の材料に使用されている元素であるため、試料の成分組成には含まないこととする。モノクロモードではストロンチウム(Sr)、ジルコニウム(Zr)などをわずか



No.19



No.28

図1 ダイレクトモード(15keV)のスペクトル

に検出する試料があったものの、全体的にスペクトルが不明瞭であるため検討を要する(図2)。また、濃青色のガラス小玉には、着色剤としてコバルト(Co)が使用されていると推測されるが、はっきりとしたピークは得られなかった。以上より、微量元素の検出精度を向上するため、測定

六. まとめ

可搬型蛍光X線分析装置の運用に向け、ガラス小玉の分析を試験的におこなった。今回は装置の特徴を把握するため、定性分析のスペクトル

条件や分析方法等の見直しが必要である。今後の課題としたい。

(3)

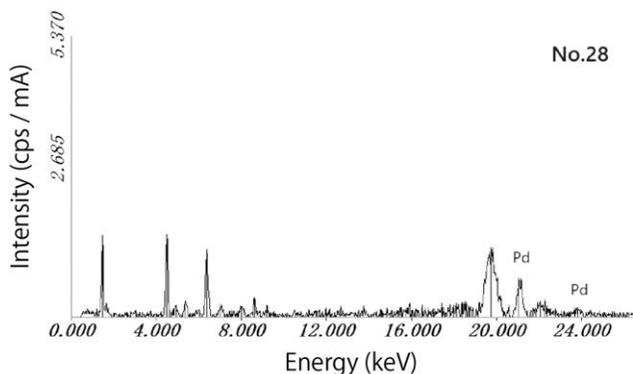
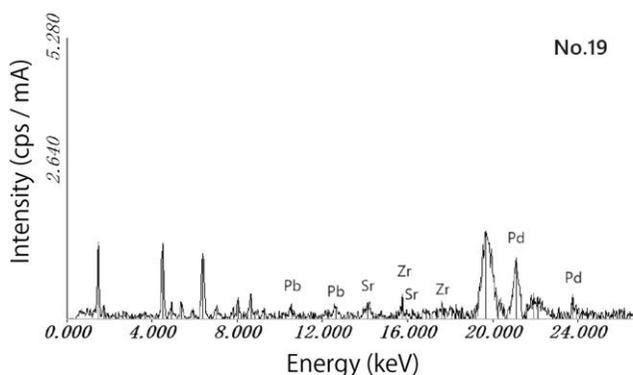


図2 モノクロモード (40keV) のスペクトル

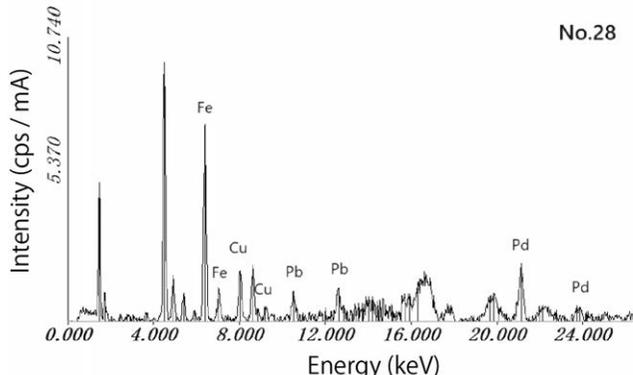
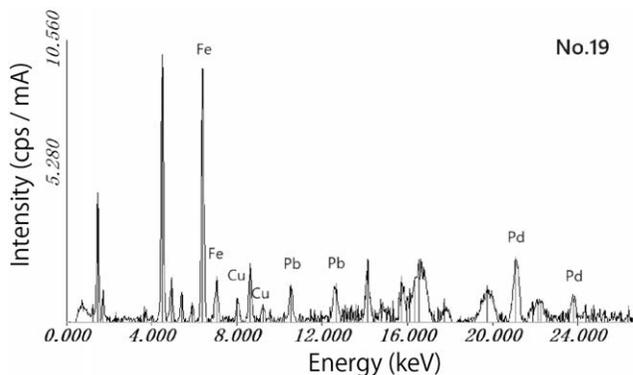


図3 ダイレクトモード (40keV) のスペクトル

波形に主眼を置いて結果を検討した。分析の結果、ガラスの主成分となる軽元素領域では比較的良好なスペクトルが得られた。一方で、含有量が少なくなる重元素の検出には課題が残った。

出土ガラス製品を生産地や製作時期により分類する場合、含有元素組成の違いが鍵となるが、そのためには各元素の定量が必要となる。今後は分析精度の向上を図るとともに、

定量分析に向けて検量線を確認し、必要に応じて再作成や標準試料の選定をおこなっていく。

【註】

(1) 本機は二〇一八年「奈良県立橿原考古学研究所創立八〇周年を祝う会」(代表・久保田昌孝 橿原神宮宮司)より研究支援事業(可搬型蛍光X線分析機器の提供)として贈呈いただいた。

(2) 肥塚隆保「古代珪酸塩ガラスの研究

―弥生―奈良時代のガラス材質の変遷―」『奈良国立文化財研究所創立四〇周年記念論文集 文化財論叢Ⅱ』同朋舎出版 一九九五年

肥塚隆保・田村朋美・大賀克彦「材質とその歴史の変遷」『月刊文化財』No. 五六六 第一法規 二〇一〇年

澤村大地・加藤千里・松崎真弓・柳瀬和也・谷口陽子・中井泉「蛍光X線分析による関東地方の遺跡から出土した古代ガラスに関する考古学的研究」

『分析化学』第六四卷八号 日本分析化学会 二〇一五年

大賀克彦・田村朋美「古墳時代前期のナトロンガラス」『古代学』第七号 奈良女子大学古代学術研究センター 二〇一五年

(3) 前掲註(2)

(4) 吉村和昭(編)『釜窪大谷東原古墳』奈良県文化財調査報告書第一三五集 奈良県立橿原考古学研究所 二〇〇九年

中国陝西省・甘肅省視察調査記

中村健太郎

一 はじめに

檀原考古学研究所では、令和四・五年度に「外部研究者等との共同による調査研究推進事業」を実施している。これは外部研究者と共同で、飛鳥時代の東西交流の一端を解明することを目的に、高松塚古墳の漆塗木棺の復元実験（共同研究一）及び壁画に関する研究（共同研究二）をおこなうものである。高松塚古墳が築造された七世紀末から八世紀初めのユーラシア東部では、唐の影響を受けた壁画が各地に見られ、それは唐との交渉を通じて文化的影響を受けたものと考えられている。今回、共同研究二のための調査として、二〇二三年一〇月一〇～一五日にかけて、川上洋一、岡林孝作、中村健太郎の三名が、中国陝西省及び甘肅省に所在する遺跡や博物館、研究機関を訪問し、唐代の壁画や遺物を調査した。

二 陝西省での調査

① 陝西歴史博物館（二日目）

一九九一年開館。中国有数の国家

博物館。今回は、唐代の壁画を展示する「唐代壁画珍宝館」を視察。西安周辺の二〇余りの墓の墓室から出土した六〇〇枚ほどの唐代壁画（章懷太子墓、懿德太子墓、永泰公主墓など）を保管する。壁画には建物、人物、器物、動植物などが描かれ、唐代の社会生活の研究に重要な資料となる。

② 陝西考古博物館（二日目）

二〇二二年開館。中国で最初の考古学の専門博物館として考古学的調査の過程、技術、方法や研究の方向性などを展示。展示品には、李暉の冠飾、顔真卿の手になる羅婉順の墓誌、唐代皇帝陵で唯一発掘された僖宗の靖陵の出土品などがある。高松塚古墳とほぼ同時代の李邕墓「馬球図」などを調査した。

③ 唐順陵（三日目）

武則天の母・楊氏の墓。国家重要文物保護財。楊氏は咸亨元年（六七〇）に逝去。高松塚古墳と同時代の唐墓の例として調査。なお、現地では、西北大学文化遺産学院の李偉書記、陝西省考古研究院の孫周勇院長

と面会、調査に便宜を図って頂いた。

三 甘肅省での調査

④ 敦煌莫高窟（四日目）

敦煌市内から東南へ二五km、鳴沙山東麓の絶壁上に位置。開削は前秦の建元二年（三六六）頃で、数百の石窟に彩色塑像と壁画を保存。壁画は洞穴の四壁、窟頂と仏龕に宗教及び世俗生活の様子を描く。現地では、敦煌研究院の蘇伯民院長と面会したほか、同研究院の劉文山氏にご案内頂き、石窟の調査をおこなうことができた。劉氏は成城大学への留学経験もあり、日本語が堪能であった。

⑤ 敦煌市博物館、榆林窟（五日目）
敦煌市博物館は、敦煌文書を始め、莫高窟周辺にある遺跡から発掘された陶磁器や古銭などを展示。榆林窟は敦煌五大石窟の一つで、莫高窟に次ぐ規模。瓜州県の南約七五キロ、南山溪谷を流れる踏実河（榆林河）の兩岸に掘られた石窟を調査した。

四 おわりに

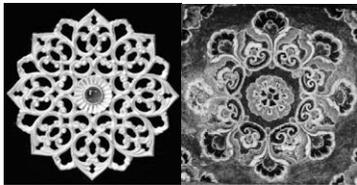
今回の調査成果は、第一に唐代壁画を実見できたことである。実物を見ることでしか知りえない壁画の微妙な色合いや質感、筆遣い、保存状態、規模などの情報をいくつも得る

ことができた。

第二に、調査を通じて唐代の壁画と高松塚古墳の出土遺物や壁画との接点にいくつか気づいたことである。具体例を一つ挙げると、高松塚古墳の金銅製透飾金具（図左）は、唐の団花文のモチーフ（例・敦煌莫高窟第三一號壁画、図右）を採用し、モデルとした可能性がある。

第三に、西北大学文化遺産学院、陝西省考古研究院、敦煌研究院を訪問し、関係者と国際的な研究連携のあり方について意見交換できたことである。檀考研では、新型コロナウイルスの感染によって中断していた国際交流を二〇二四年度以降本格的に再開させることを目指している。今後の交流の弾みとしたい。

今回の調査にあたってお世話になった皆様にご心より感謝を申し上げます。



（右）敦煌莫高窟第31号壁画の団花文図
（敦煌研究院編『敦煌石窟全集26
案卷下』2003年/敦煌研究院提供）
（左）高松塚古墳出土金銅製透飾金具
（復元品）

漢城百濟博物館との包括連携協定締結

小栗明彦

始まりは二〇二二年四月二十九日付
 けでユ・ビョンハ漢城百濟博物館長
 (当時)から青柳正規所長宛に送られ
 てきた一通の書信である。研究、展
 示等の相互協力を希望する内容であつ
 た。漢城百濟博物館は韓国ソウル特
 別市の公的機関であつて、発掘調査
 研究部門と博物館部門を兼備してお
 り、当研究所と相似する組織体であ
 る。開館一〇年余りと若くはあるが、

た特別展や学術大会を開催し、精力
 的に研究書も刊行する学界注目の気
 鋭の機関である。連携協力する相手
 として不足はないばかりか、それ以
 上に百濟を理解する上で多くを学ぶ
 ことのできる、当研究所にとって極
 めて有益な相手であることに間違い
 ない。

漢城期百濟の王宮である夢村土城、
 王陵である石村洞古墳群の学術調査
 を継続的に担うほか、毎年、力の入つ

千載一遇の好機と見た私は、岡林
 孝作副所長(当時)に大切にしたい
 相手機関であると相談しつつ、担当
 者のチェ・チュンギ学芸研究士に書
 信の詳細な意図を問い合わせた。ま

協定締結式

(漢城百濟博側：中央から左へキム・チヨン館長、
 バク・ソンウン総務課長、クオン・スン Chol 遺物科学課長、
 バク・チュンギユン百濟学研究所長、イ・キョンジャ教育広報課長、
 チョ・ヨンフン展示企画課長)
 (当研究所側：中央から右へ青柳正規所長、大塚朝記副所長、
 吉村和昭学芸課長、小栗明彦企画係長)

だ日本には連携機関がな
 く、相手を探している。ま
 他の機関にも協力希望の
 書信を送つてはいるが、
 当研究所が意中の相手で
 あるとのこと。ここで互
 いに連携機関を目指す方
 向性が見えた。
 同年一〇月二六日、二
 九日に漢城百濟博開館十
 周年記念特別展開連国際
 学術大会「百濟王都漢城
 に対する新しい理解」へ



陝西省考古研究院と協定締結
 青柳正規所長と種建策院長



西北大学文化遺産学院と協定締結
 青柳正規所長と馬健院長

重見泰主任研究員を派遣、一月二
 三日に漢城百濟博物館ユ・ビョンハ
 館長、チェ・チュンギ学芸研究士が
 当研究所に来訪して青柳正規所長と
 面談、翌年二月二六日に青柳正規所
 長以下当研究所代表団が漢城百濟博
 物館を訪問面談し、連携協定締結方
 針に合意成立となった。この度一一
 月一九日、二二日に当研究所代表団
 が招聘を受けて訪韓し、二〇日に漢
 城百濟博にて青柳正規所長、キム・

陝西省考古研究院、

西北大学文化遺産学院と の友好共同交流協定締結

北井利幸

二〇二四年一月二八日から三十一
 にかけて青柳正規所長以下当研究所
 代表団が陝西省考古研究院と西北大
 学文化遺産学院を訪問した。
 一月二十九日に陝西省考古研究院で

種建策院長と、翌三〇日には西北大
 学文化遺産学院で馬健院長と面談し、
 二〇一六年に締結した友好共同交流
 協定更新のため両機関で調印式をお
 こなった。

チヨン館長が「文化遺産及び考古学・
 古代史分野の交流協力に関する包括
 協定書」に署名して、包括連携協定
 締結と相成った。

協定の主な内容は、職員相互派遣
 の積極的推進、展覧会開催の協力、
 共同調査研究の推進、講演会等への
 職員派遣、刊行物の交換である。こ
 の協定が今後の当研究所の飛躍に寄
 与することは間違いない。大事に育
 んでいこうではないか。

令和五年度イタリア研修記

宇野隆志・北井利幸

一 はじめに

八月三十一日から九月二三日まで、筆者らはイタリア研修に派遣された。樺原考古学研究所としては、二年目の派遣事業である。主な目的は、東京大学が実施するソンマ・ヴェスヴィアーナの発掘調査への参加を通して発掘調査技術を両機関で共有することと、イタリア国内に所在する遺跡や文化遺産、博物館等の見学を通して、考古学および文化的な知見を広めることである。

行程の概要を示す。八月三十一日に関西国際空港より出国。翌九月一日にナポリ・カポデキリーノ空港着、同日昼にソンマ・ヴェスヴィアーナに到着。以後、週末の作業休日を除く計六日間、発掘調査に従事し、週末はナポリ近郊の遺跡や博物館を見学した。調査従事後の帰国までに至る計一日間は、各自が事前に計画した行程に基づいて、各々単独で行動することを中心とした。九月二日、ローマ・フィウミチーノ空港発、九月二三日に関西国際空港着、帰国。

(宇野・北井)

二 ソンマでの発掘調査

イタリア滞在の序盤は、ソンマ・ヴェスヴィアーナにおける発掘調査に参加した。(これまでの調査成果その他詳細については、文末参考文献を参照されたい。)

調査当日は七時過ぎに宿舍を出発し、七時半頃から調査を開始する。水分補給等の休憩は各自の判断に任されていた。昼休みは一二時から一時間、食事担当の作業員の合図で始まる。昼食はパスタが基本で、予算の都合でエビやイカなどの魚介類が追加されることもあった。一三時から作業を再開し、一六時頃に終了。乾季のため、雨除けのシートを調査区にかけることはない。地中海性気候のため、日本ほどの蒸し暑さはないが、日差しの強さは日本と同等かそれ以上に感じた。

作業内容としては、下層建物の廃絶が西暦七九年のヴェスヴィオ山の噴火を直接の契機とすることが明らかとなった近年の調査成果を踏まえ、下層建物のうち、主に「VAN022」と名付けられた部屋の内部堆積層の

掘り下げおよび埋没状況の検出であった。「VAN022」はアウグストゥスの別荘と年代的に関連性のある西暦七九年の噴火に伴う埋没遺構であり、長年にわたる一連の調査においても非常に注目度の高い調査工程であった。「VAN022」内部は、噴火堆積物とともに、その流入に伴って倒壊した多量の壁土や瓦で埋没していた。火山噴火に伴う堆積土は非常に硬く、人力では掘削が困難なため、削岩機が大いに役に立った。掘削作業の過程で、原位置を保つアンフォラの検出などに直に携わる幸運にも恵まれた。学生時代、初めての発掘調査現場で経験したような胸の高鳴りであった。

掘り下げおよび埋没状況の検出される広範囲の遺跡においては、特に合理的かつ有効な調査手法といえる。発掘調査への従事を通して、見慣れない遺構・遺物だけでなく、国内では経験しがたい調査手法にも触れることができた。

調査参加中は、調査現場から車で一〇分程の距離にある東京大学が借り上げた宿舍に滞在させて頂いた。調査担当者である東京大学の松山聡さん、岩城克典さん、杉山浩平さんには、調査だけでなく、宿舍での生活でも大変お世話になった。日中は日差しの強いイタリアも、夕方は涼しく快適で、二〇時頃まで明るかった。夕方、シャワーを浴びた後、宿舍のテラスで心地よい風に吹かれながらのんびりと過ごした至福の一時は今でも忘れられない。(宇野)

発掘調査団では、土層の堆積それぞれを一つの「ユニット」「イベント」と捉えて、各遺構および各土層の先後関係を調査エリアごとに系統整理しつつ、複数系統の併行関係を共通する層位(鍵層)でつなぎ合わせることによって、各遺構および各層位から構成される遺跡全体の時間的な先後関係(縦軸)と併行関係(横軸)を総合的に理解するという調査手法を採用していた。度重なる各時代の噴火堆積土によって深く埋没し、立体的な構造物が遺構として重複し



発掘調査現場での記念撮影
(左から松山聡さん、岩城克典さん、杉山浩平さん、宇野、北井)

三. イタリア見聞録

ナポリ、ローマでの視察

学生時代に西洋史を熱心に学んでこなかったため、特に古代ローマ史に関しては予習し、行き先を入念に下調べした。ソンマの遺跡調査とも関連させて、ローマ帝国時代の遺跡を重点的に訪れることとし、ナポリとローマ、およびそれら近郊の遺跡や博物館等を訪れた。遺跡ではその内容の理解とともに、整備状況にも関心を払い、膨大な量の展示品が並ぶ博物館では、ローマ帝国時代の遺物とともに、エトルリアの鏡への観察に時間を割いた。

主な訪問先は左記のとおりである。

〔ナポリとその近郊〕ヴェスヴィオ火山、ナポリ国立考古学博物館、ポンベイ考古公園、エルコラーノ考古学公園、オプロンティス・ポスコレアーレ、アマルフィ海岸、バエストゥム考古学公園。

〔ローマとその近郊〕国立ローマ博物館、フォロロマーノ周辺、国立ヴィラ・ジュリア博物館、ヴァティカン博物館、ヴィッラアドリアーナ、カラカラ浴場、パンテオン、オステイア・アンティカ。(宇野・北井)

ジェノヴァ・アンコーナでの視察

九月一日から一三日にリグーリ

ア州ジェノヴァ市のキヨッソーネ東洋美術館で青銅器の調査、一日・二日にマルケ州アンコーナ市のオメロ触覚美術館を視察した。

キヨッソーネ東洋美術館は明治八年(一八七五)に來日したエドアルド・キヨッソーネの収集品を収蔵・展示している。特別展「富嶽三十六景」を開催中で、來館者が熱心に見学していたことが印象的であった。

日本の弥生・古墳時代の青銅器には鐸・戈・矛・鏡があり、そのうち銅鐸は寺澤薫氏が紹介している。今回の調査で、鑄掛けを確認し、文様の類似性・舞の形状から石上二号銅鐸以降に同一工人によって製作されたことを確認した。

オメロ触覚美術館では、アルド理事長と面談し、創立の経緯や目的、イタリアにおける博物館・美術館のユニバーサル化の状況について話を伺い、視覚障害者を対象とした活動や施設を視察した。アルド氏の進めた視覚障害者が楽しめる博物館、美術館の取り組みは博物館や遺跡の解説板に点字や触察パネルという形で取り入れられていた。カラカラ浴場ではモザイクの形状・色を突線と凹凸で表現していた。日本でも導入すべき取り組みと感じた。(北井)

四. 終わりに

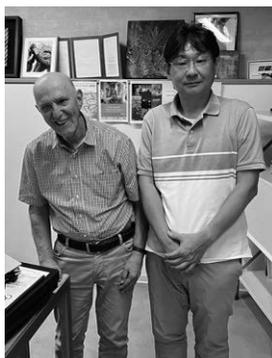
研修の目的の一つに発掘調査の指導があった。一五年ぶりの発掘調査で不安しかなかったが、宇野所員の協力のもと過ごすことができた。強い陽射しに悲鳴をあげる体も、杉山さんの手料理とおいしい昼食に助けられた。イタリアの遺跡や博物館の



キヨッソーネ東洋美術館



流水文銅鐸



アルド理事長と記念撮影

視察は貴重な経験となり、視野を広げられた。最後になりましたが関係者の皆様に感謝申し上げます。(北井)

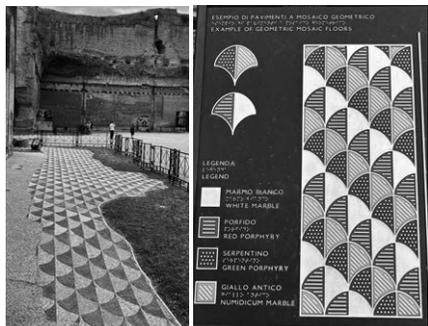
【註】

(一) 東京大学大学院総合文化研究科グローバル地域研究機構地中海地域研究部門「イタリア ヴェスヴィオ山の噴火罹災遺跡の学術調査二〇〇二―二〇二〇年」二〇二一年

北山峰生「ソンマ・ヴェスヴィアーナでの発掘とイタリア見学行(上)」

(下)「青陵」第一六九・一七〇号 奈良県立橿原考古学研究所 二〇二三年 (2) 寺澤 薫「付章 Museo d'Arte Orientale「Edoardo Chiossonne」所蔵の銅鐸」

「シルクロード学研究」五―シルクロード学研究中心―研究紀要 シルクロード学研究中心―一九九八年



モザイクを表現した触察解説板 (カラカラ浴場)

研究会集會・いのししの会

第三七〇回研究会集會が令和六年一月一四日(日)に研究所講堂にて開催され、右島和夫特別指導研究員が「古墳時代の榛名山噴火と馬匹生産遺跡」と題して発表されました。研究会集會終了後には、正面玄関前で記念撮影をおこない、いのししの会を榎原オークホテルにて開催しました。研究会集會には七六名、いのししの会には七〇名の参加がありました。(順不同、敬称は略させて頂きました。)

〔奈良国立博物館〕井上洋一、「明日香村」森川裕一、「大淀町教育委員会」松田度、「公財」由良大和古代文化研究協会 泉森 皎・稲村和子、「友史会」田中吉満・福山雄二・山本哲夫・島岡弘行、「一財」榎原考古文化財団 大西寿江・青木明美・松浦章一・藤原三津子・森田 勝、「報道関係者」清水謙司・井山大我・小畑三秋・岡崎雅樹・関口和哉・篠崎善博・牟田口章人・今井邦彦・竹内義治、「文化資源活用課」森井順之、「特別指導研究員」前園實知雄・稲村達也・右島和夫・千賀 久・田中俊明・田中晋作、「共同研究員」中井一夫・山内紀嗣・泉 武・森岡秀人・梅咲直照・福田さよ子・橋本裕行・卜部行弘・清水昭博、「研究所員」青柳正規・大峯朝記・岡林孝作・川上洋一・



研究所玄関前での記念撮影

(着席者左から、稲村和也、森岡秀人、川上洋一、中井一夫、右島和夫、青柳正規、泉森 皎、井上洋一、前園實知雄、田中晋作)

箕倉永子・米川仁一・中村健太郎・小栗明彦・高木清生・北井利幸・東影 悠・水野敏典・河崎衣美・小倉頌子・吉村和昭・青柳泰介・平井洗史・伊東菜々子・大西貴夫・米川裕治・岡田憲一・廣岡孝信・岡田雅彦・岡見知紀・前田俊雄・内藤元太・辰巳祐樹・西浦 熙・小泉翔太・黒澤ひかり・富田 樹・米田敏幸・鈴木裕明・本村充保・鈴木一謙・中野 咲・小池香津江・藤元正太、「関係者」今尾文昭、石黒勝己

アトリウム展案内

研究所一階アトリウムでパネルを中心に展示しています。来年度は科研費による研究成果展、保存科学棟の三〇年展などを予定しています。詳細はホームページなどで公開します。観覧時間は月曜日から金曜日の八時三〇分から一七時一五分です。

計 報

令和五年一月一六日(木)に研究顧問の石部正志先生が逝去されました。永年にわたり、研究所の活動にご尽力頂きありがとうございます。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

附属博物館展示案内

◎二〇二四年度 春季特別展

「家形埴輪の世界」

会期：令和六年四月二〇日(土)

～六月一六日(日)

家形埴輪は、埴輪が古墳上に配置された全期間にわたって存続したと考えられる数少ない種類の一つです。ただし、構造が複雑で大型品も多いため、その実態がよく分からず、展示で取り上げられる機会が少ない埴輪でもあります。このたびの展覧会では古墳時代の政治的な中枢が存在した奈良県内の資料を中心に、東日本と西日本で最大の製品も展示して、謎の多い家形埴輪の実態に迫ってみたいと思います。

研究講座(全三回)

第一回 四月二八日(日)

第二回 五月一二日(日)

第三回 六月九日(日)



家形埴輪／今城塚古墳
(高槻市 提供)